

今回の体育部報は、9月から行われた小学校体育大会についてです。部活動指導で大切にしていること、日々の練習で工夫されていることについて、執筆していただきました。

### 「私、泳ぎたいです」

岡崎市立緑丘小学校 村上 健太郎

このチームのよいところは、最後まで泳ぐ仲間に、「がんばれー」「ファイトー」と声を出して応援し続けられることである。4月、水泳部の練習は陸上トレーニングからスタートした。休日の2時間練習では、ランニング・ダッシュ・縄跳びを中心に練習を行った。プールの練習がスタートすると、女子部員のAからの「先生、もっと頑張りたいので、練習時間を延ばしてほしいです。」という前向きな言葉があった。その言葉にやる気を感じ、本当に嬉しくなった。

そんな子供たちの泳力をもっと伸ばしたいと思ったが、なかなかうまくいかなかった。私自身、顧問として未熟なので、知り合いの先生にご指導をいただいた。そこで、「泳ぎが速くなるためには、どれだけたくさん水の中で過ごすかが大事。そして、苦しくても、泳ぐことは楽しいと感じさせてあげることが大事」という言葉と、子供の意欲を高めるアイデアや練習方法をいただいた。まず、意欲を高めるために、記録測定を随時行い、記録が伸びたら「新記録証」を渡した。次に、具体的な練習方法では、できる限り飽きずにかつ水中での活動時間を増やすために、コインを使った背泳ぎ練習をしたり、水かきやフィンを使ったプル練習をしたりした。キック中心の基礎練習は常に行いつつ、さまざまな練習を取り入れたことで、水の中で過ごす時間が増え、日に日にタイムが伸びていった。

水泳大会前日。選手の体調不良により、男子部員がそろわず、このままでは、リレーに出場できなくなりそうになった。水泳大会当日。水泳部のメンバーに、男子が3人しか来ることができないことを伝えた。一瞬、間があった。「えっ、どうするの。」戸惑いの声上がる。リレーは、棄権するか、競技としての記録としては残らないけれど、女子部員が泳いでつなぐかという話をした。しばらく、間があった。すると、「私、泳ぎたいです。」とAから声が上がった。表情は真剣だった。するとBも、「私も、泳ぎたいです。」と言った。その言葉に、男子のリレーメンバーからは自然と笑みがこぼれた。私は、仲間のことを考えて行動しようとする子供の姿が、素直に嬉しかった。この水泳部メンバーがさらに好きになった。

最終的に、Aが懸命に泳ぎ、男子のリレーをつないだ。そんな仲間に対して、緑丘小メンバーは最後まで惜しめない拍手を送った。上位入賞はできなかったが、出場した選手全員が、自己ベストタイムで泳ぎ切ることができた。最後に、運営面で中心に動いて下さった先生、会場校の先生方に感謝を申し上げます。ありがとうございました。



### 「やり遂げる」

岡崎市立福岡小学校 志賀 俊太

試合だから勝ち負けがあり、そこにこだわる必要は当然ある。しかし、小学校の部活動の価値は、それだけではない。中学校のように部活動の種類がたくさんあるわけではなく、限られた部活動の種類から入部を希望する。毎年、入部した動機、運動能力とさまざまな児童がいる。この個々がチームとならなければならない。その支援をするのが顧問の責務と考えている。私はゲームセット後のミーティングでの児童の表情に注目している。その表情に児童の部活動をやり切った度合いが表れるからだ。やり切ったと思えるためにチームが一つの目標をもち、それに向かって努力していかなければならない。そこに価値があると考えている。私は日ごろの練習から、「声を大事にしよう。」と児童に伝え続けている。チームメイト同士のプレーに関係する指示の声はもちろんのこと、称賛や励ましの声、技能のアドバイスをする対話、ときにはチームの士気を高めるための想いのつまった強い声大会に近づくにつれて増えてきた。9月。練習できる日数も10回ほどである。部活動選手激励会で、キャプテンは「チームワークだけは、どの学校にも負けずに戦いたい。」と熱く宣言した。5年生、6年生の学年も関係なくチームメイト同士が声を掛け合っている様子が見られ、うれしかった。これなら自分たちの目指す目標に向かって自信をもって臨めると確信できた。

大会初戦。空振りしたバッターに「ナイススイング」と声を掛け、三者凡退で抑えてナインがベンチに戻ってくるとナインに「このまま福岡のペースにもうていこう」とベンチメンバーが盛り立てた。点差が離されて劣勢になっても、児童の試合に臨む姿勢は変わることはなかった。チームの目標を達



成しようとする児童の姿を頼もしく感じた。試合後のミーティング。選手一人一人の顔を見ながら話をした。負けたことや、自分のプレーに対する不満からくる悔しさはあるだろうが、それ以上にやり切った表情があった。最後に大会運営にあたってくださった先生方に心から感謝しています。ありがとうございました。

### 「笑顔で終止符」

岡崎市立本宿小学校 小黒 真希

「誰からも愛されるチームになろう。」子供たちには、チーム発足時にこの言葉をかけた。そして部員一人ひとりがどんな時でも「礼儀正しく」「一生懸命に」「爽やかな挨拶」この3つができる人間になってほしいと願い、指導してきた。新チームでの活動が始まって、子供たちは「大会でベスト4になる」という目標を掲げた。今年の6年生はたったの6人。1人でも欠けたら6年生だけでは試合に出ることができない。彼女たちは、積極的に部活動に参加し、互いに声をかけ合って一生懸命練習に取り組んだ。そして1分でも長く練習するために、5年生に指示を出しながらきびきびと準備や片付けをするようになった。大会当日、6年生にとっては初めてで最後の大会。技術面に課題は残ったが、どんな結果になろうと、笑顔で終われるように「楽しくやること」を目標にした。一方「楽しくバレーができるかな、がちがちに緊張していないかな。」と少し心配でもあった。ところが、試合前の子供たちの表情はとてむくむくしているようだった。試合中は終始笑顔で、楽しそうにバレーボールをしていた。見ている自分も思わず笑顔になるくらい、気持ちよかった。結果は第3位で目標達成。想像もしていなかった入賞。準決勝で負けた後もすがすがしい表情で「楽しかった。」と口々に言う子供たちを心から誇りに思った。本番当日に試合を楽しむことができたのは、今までの努力、たくさんの人の応援があつたのことだったと思う。「皆の努力を神様が見てくれたのかもね。」と子供たちと笑って話ができただことは一生忘れないだろう。

最後に、コロナ禍の中でもたくさんの方々のお思いや協力によって市内の子供たちが輝くことができる機会をいただけたことに心から感謝します。子供たちのためにありがとうございました。



### 「地味に地道に」

岡崎市立羽根小学校 福與 佑希

本校では、小学校体育大会における6年生児童の活躍の場を増やすために、活動期間を定めて、休部していた陸上部を再開させた。入部説明会には15名もの児童が集まったが、最終的に入部を決めたのは、絵画部やサッカー部に所属していた3名の児童だった。少数の部員で始まった陸上部であるが、児童がやる気に満ち溢れた目をしていて、活動の初日に、「誰からも愛されるチームになろう。」と伝えた。愛されるチームになるために何が必要なのかを全員で考え、誰に対しても挨拶をし、礼儀を尽くしていく必要があることに児童は気づいた。それから練習を重ねていくと、次第に多くの人から「陸上部の子たちは毎日練習を頑張っているね。」という声が私に届くようになった。さらに、友達や先生、地域の方から直接応援の声をかけていただける機会も増えた。陸上競技は、自分に対する厳しさがなければ、技術や体力を高めることは難しい。そのため、記録を伸ばすために練習が苛酷になりがちである。児童は、その厳しさに何度も直面していた。だが、周りからの応援が増えることによって、高いモチベーションを保ちながら練習を続けることができた。

また、活動を通して、愛されるチームを目指すことの意義を学ぶことができたようだった。陸上部発足と同時に、伝えたことがもう一つある。それは、「努力を続ければ必ず自分の力になる」ということだ。3名の児童は、陸上の特段得意なわけではない。しかし、自己の成長を信じ、ひたむきに練習に取り組み、休日には声を掛け合って自主的に体を動かす姿があった。その成果が出たのは、岡崎市民陸上大会である。初めての大会に、不安や緊張を抑えきれない児童たちであった。しかし、競技時間が近づくと、自信に溢れた目になり、堂々と各競技に取り組む姿がそこにはあった。結果、全員が入賞を果たすことができた。今までの地道な努力が、実を結んだ瞬間であった。大会後に話を聞くと、口をそろえて「今までの練習が自信に変わった。」と言った。苦しい時も投げ出さずに続ければ、努力が報われるということ、部活動という場で学ぶことができた。こうした成功体験は、今後、児童が生きていくうえで大きな糧となるだろう。

市民陸上大会の後、児童はけがや病気に見舞われ、長期の活動停止を余儀なくされた。小学校陸上大会では力を出し切ることができなかったが、児童にとって、陸上部は多くのことを学ぶことができた場だったのであろう。将来、苦しいときでも地道に取り組む、大輪の花を咲かせる姿に期待したい。最後に、コロナ禍の中、たくさんの方々のお支えによって、このような機会がいただけたことに深く感謝している。ありがとうございました。

